

## 「瀬戸際」、私の理解

高部英明

所内版の最終チェックを毎週火曜日に行っている。今週は、S君の記事の後に私の野辺山出張記（穴埋め記事）が載る予定だった。ところが、S君の記事を読んで、一教授として看過できず、表題の記事を書くことにした。今、26日、夜10時。

レーザー研が瀬戸際に立たされているのは、何も今に始まったわけではない。中井先生がセンター長をしていた後半から、私は「瀬戸際だ」と自覚していた。その頃、所内版に「文化としてのレーザー核融合」(93年)などの記事を書いたりした。「高部は何を考えているのだ」と核融合一直線の人は反発・冷笑したと思う。「金剛計画、金剛計画」とバブルを追い求めていた頃、核融合科研以外ではバブルはずではじけていたのである。それが今、ITERの時代に入り、核融合科研にバブル神話を信じる一団が居ることは、何か「核融合の輪廻転生の性(さが)」のようなものを感じてしまう。

宮永教授がかつて紹介したブラッグ先生の教訓。第1は「過去の栄光を追うこと無かれ」であった。「追う」というより「しがみ付く」の感がある。大切なことは、過去に我々は何を経験し、学び、それを現代という場にいかに最大限に生かすか、である。研究は生き物である。千代衛先生が所長の時「研究所は15年が命。それを過ぎたら、潰してしまえ」とよく言われていた。自民党と同じで、レーザー研も「解党的改革」が求められている。それに躊躇する守旧派とは「既得権益に胡座をかいて、ずる賢いだけで、無能な人たちの集り」を指す。自分はどうか。個人個人考えてみよう。

守旧を捨てるには勇気が必要です。そして、才能も。両方無くともどちらかでもあれば、事態は変化します。いま、S君たちに大切なことは、瀬戸際であることを正しく理解し(単に、パニックに陥るのではなく、情報を集め分析すること)来るべき大変革を前に、自分の商品価値を高める努力をすることです。そして、「変化はチャンス」と捉える勇気と、第三者に評価してもらえぬ己の才能を磨いておくこと。加えて、常に発信することも忘れずに。日々のそのような心がけが精神の安定と物事への集中力をもたらしてくれます。自覚を持ち、自分を信じることです。

小泉総理の一声で、大学は平成15年4月から、独立行政法人となりそうです。あと、2年もありません。概算要求などは1年以上前から説明が必要ですから、この夏にも「レーザー研の中期5カ年計画」を、文科省や総長に説明する必要があります。今までと違い、独法化後は「大阪大学株式会社」が、自社の経営にとってレーザー研の計画は好ましいか、判断するでしょう。つまり、特に工学部や理学部の先生方が「レーザー研の計画は阪大に好ましい。身銭を切ってもやらせるべきだ」と、判断してくれない限り、大計画は実現不可能です。そして、独法化後はいかにして「共存共栄」していくか、具体的に考えてください。ただし、「大学内に反発があるなら、阪大から出て行けばいい」と考える教官もいるでしょう。その時は、私は袂(たもと)を分かつつもりです。

行政構造改革の精神を理解すれば、きわめて常識的な判断を我々は迫られているのだと思います。過去の栄光は忘れ、レーザー研というすばらしい環境で身に付けてきたものをベースに、裸でどこまで自分がやれるか挑戦してみようではありませんか。今まで自覚を怠ってきた人は今日から始めましょう。遅くはありません。五年、頑張ってください。道は開けます。

信じがたい事ですが私はあと二年で50才です。しかし、実は、第二の人生というか、本当の自分らしさが発揮できるのはこれからだ、と楽しみにしているのです。レーザー研という恵まれた環境と自分という個が巡り会えたことで、今日の私があり、その私は「21世紀の商品」として十分な価値があると思っています。決して自惚(うぬぼ)れではなく。